

ロータリアン・フェイス

岡山東 浦上 澤之

今はまさに情報化の時代でしょうか。国際ロータリーとロータリー財団は協同で戦略を策定し、優先事項も着実に推し進め、ロータリーの奉仕の方向をまとめました。その後、インターネット上にロータリーの変化が時々刻々とそこに載せられます。そのせいか、かえってロータリーが複雑に見える、奉仕の意味がわからなくなった、と耳にすることが多くなっているように思います。

しかし、ロータリーの基本が変わったわけではありません。そもそもロータリーが始まったのは、この世での私たちの幸福は他人への思いやりと互いに助け合うことから生まれる、と意識することになりました。

ロータリーで職業奉仕は中心的課題です。ロータリーはいわば評判の良い職業人の集いであり、自分の事業に成功し、その成果から十分な利潤を上げている人々の集いといえます。ここに倫理が目覚め、利潤の中から自分に適正な利益を受け取り、残りは社会にお返しすれば、必ず社会からの報恩があり、事業

は継続的に繁栄できる、としたのです。すなわち、人のためにすることが自分のためになると気づき、そのように考え行動することをあらためて奉仕と呼びました。

この利己優先はその後、他利優先の「Self, Not Self (無私の奉仕)」なども経て、自分の存在を基軸とする標語「超我の奉仕」に至り、ロータリーの哲学に集約されていきます。このように見ると、「ロータリーの目的」に「ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある」と記されたことが歴史的、有機的によくわかります。幸福論から始まり、道徳論が成立したのです。

従ってロータリーは知育の場ではなく、徳

育の場です。そのためか歴史のあるクラブの例会はロータリアン・フェイスで満ちています。修行に専念する僧侶が、僧侶としての容貌を備えることが類例でしょうか。世のため、人のために心を例会に出席すると親睦が深まるのは、出会うロータリアンの言動に表れる奉仕の心によって友愛の交流が行われ、職業奉仕やロータリーの哲学に感覚をさらに研ぎ澄ませ、高い境地に近づくからではないでしょうか。この時間こそ、ロータリアン・フェイスが培われる場なのでしょう。

一方、この一〇〇年で社会は大いに進みました。初期の倫理観や職業奉仕の表現は見直され、「ロータリーの行動規範」に書き改められ実践しやすくなりました。また、「四つのテスト」で自分の言動を検討できるのも職業奉仕からの恩恵です。ロータリアン・フェイスを求め、職業奉仕を大切にしたいものです。